

第四十四回評論・隨筆賞

評論部門 二つの「昭和」を生きた天皇の歌（令和3年5月号）

静岡 水辺あお

評論部門 老いらくの遊戯―良寛の手鞠―（令和3年7月号）

山口 百留ななみ

水辺あおの評論について

本評論は、昭和天皇の歌について多くの資料をもとに独自の視点を交えつつ論じたものである。最初に「八・一五を境とした二つの「昭和」を生きた歌人のひとりでもあった昭和天皇は、くやしさをバネに新時代を生き抜こうとしたようにみえる」とあるように、昭和天皇を一人の歌人と捉えて、生の人物像に迫った点が斬新である。東宮時代の侍従・入江為守は藤原定家を祖にもつ冷泉家出身で、当時御歌みうた所長でもあったという。「昭和天皇の歌は、正岡子規からはじまる近代短歌とは異なる、古来の和歌の流れのなかにあったのである」と指摘する。

東京大空襲の罹災地を視察した歌、終戦時の歌、全国巡幸の歌、新憲法発布の時の歌、広島・長崎訪問の歌などを上げ、時には疑問を率直に呈しつつ、昭和天皇の心の内を推察する。そして「戦前から一貫して統率者としての意識を持つ天皇は、新憲法の規定に従いながらも、

戦後復興の原動力たらんとした」と結論づける。水辺氏は、皇室関係の著作を多くもつその道の専門家である。豊富な知識をもとに昭和天皇の歌を概観し、その要点を簡潔にまとめた手腕はさすがといっている。歌壇で正面から論じられることの少ない昭和天皇の歌に的確な評の光をあてたことを評価し、さらに厚みのある論考を期待するものがある。

百留ななみの評論について

この評論は、江戸末期の禅僧良寛の和歌にある「遊戯（ゆげ）」が、同郷の歌人宮柊二の短歌作品にいかにか摂取されていたかを明らかにした一編。あらゆるジャンルの柊二作品はもちろん、柊二の師である北原白秋の詩・短歌・随筆、また林壘雄『良寛禪師歌集』、東郷豊治『良寛歌集』、小高賢『宮柊二とその時代』、桑原正紀『歌の光芒』など、本稿を執筆するにあたり、丁寧に資料に当たったことがわかる力作である。

柘二作品に良寛が登場するのは病状が悪化し、老いも深まった頃の第八歌集「獨石馬」からで、平明で意外なほど自在な作風の背景には、風土のみならず、生育歴、死生観も相通するもののある良寛の影響が大きかったことの論拠を提示する。本論第二章中に引用された良寛の言葉「災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよくなる候、死ぬる時節には死ぬるがよくなる候、是は災難をのがるる妙法にて候」はその一例である。

終章「良寛遺愛の鞠」で柘二と良寛の手鞠の関係性が明かされる。良寛を深く敬慕し、遺愛の手鞠を贈られ喜ぶ師白秋。その時期秘書として白秋宅に勤務していた柘二はその鞠を手にしたことがあったのではないかという百留氏の推測が美しい。この遊戯の具象とも言うべき存在が柘二の晩年を豊かならしめたことを読者として嬉しく思う。



水辺あお

感想

戦後生まれの私は、戦前と戦後を生きた人々のありように関心がありません。近年昭和天皇の未発表の歌が公開され、刺戟を受け、これを書く機会をいただきました。ありがとうございます。



百留ななみ

感想

思いがけず伝統ある賞をいただき胸がいっぱいです。書き進めるうちに夢中になり良寛、白秋、柘二のつながりをしみしみ感じました。これからも真摯に短歌に向きあっていこうと思います。ありがとうございます。

略歴

一九五二年 東京生まれ
二〇一八年 コスモス短歌会入会
二〇二一年 第十八回純黄賞受賞

略歴

一九六四年 山口県生まれ
二〇〇三年 香騰人短歌会入会
二〇〇三年 コスモス短歌会入会

《選考過程》

選考団に推薦を求め、高野・影山・桑原・狩野・宮里・小島・木畑・大松・田宮・津金・小山・藤野・風間・田中・橘・水上比・鈴木・原賀・水上美・大野・松尾の各氏から回答があった。被推薦者は評論部門六篇、随筆部門六篇であった。

推薦の内訳（一人1点）は、評論部門が水

辺あお「二つの「昭和」を生きた天皇の歌」7点、百留ななみ「老いらくの遊戯」7点、米田靖子「前登志夫の「村」をめぐる歌について」4点、金子智佐代「椿に仮託するとき」4点、矢野京子小論「1点、斎藤美衣「衣の歌」1点、宮内博子「社会事象と作者の関係性による表現について」1点であった。

随筆部門は浦部晶夫「私の愛誦歌」5点、

人見江一「当直の夜」3点、藤井徳子「中川一政の短歌と絵画」2点、田中愛子「日本語「こぼれ話」1点、竹内夏実「木と草と風と」1点、岩本豊子「さるすべり」1点であった。これを二月十二日、編集部で検討した結果、評論部門は水辺あお、百留ななみの受賞が決まり、随筆部門は受賞作無しとなった。